

街上雜觀

みごり

去年の暮のある日の午後、さる電車交又點で、急ぎ走る行人を、しつこく引きとめる救世軍の慈善鍋の關所を辛うじてのがれた二人の婦人が、電車待つ間の氣焔を、聞かまゝに。

* * * * *

甲「私は二三年このかたあの慈善鍋に對して、ひそかに疑問を懷くようになりましたの、そして、此頃では、自分の考がますます／＼はつきりして來ましたからあれにはお金を施すまいと思つてゐます」。

乙「そう、私も、あれは賛成してゐません。一體、貧民救濟といふことに、私は、もつと根本的な解決が必要だと思ひますの」。

甲「そうですとも、私の疑問といふのがそれなんです。あゝして毎年々々何千圓かのお金を多くの人から集めて、大骨折つて、そして何をするかといへば貧民にお餅やその他のものを與へて、彼等に楽しい正月を迎へさせるといふんですねえ。それは、結構

なことに違ひないんです。けれどもね、毎年々々さうして、貧民を賑はすといふことが、それが貧民救濟の根本的なものとは思へませんのよ」。

乙「え、貧民はあそこから／＼どん／＼出來て來るぢやありませんか、今年、救世軍からお餅をもらつたから、或は聖書を一冊もらつたから、急に、心を入れかへて、又は運がむいて來て、來年は、その貧民窟を脱してゐるといふのならい／＼けれど、そんな事は先づありません」。

甲「それどころか、私は、あの餅くばりの弊害をどんなにか、嫌な、寧ろ腹立たしい氣分で聞いたか知りません。貧民の心理なんでものは、私達から考へると本當にさもしいと思ひますよ。だつて、貰へるとなれば、それをあてにして貰へば貰ひ得といふ考へであるのですもの。年の暮にお餅の五十錢や一圓買へないほどの貧民ならば、お餅をやるところか、もつと根本的に救つてやらなければならぬぢやあ

りませんか。もつとも、今は全くたゞでやるのでなく安く賣るといふこともきゝました。がそれにしてもまだ考へねばなりませんね」。

乙「こんな話もきゝました。貧民の中でも、心がけのよいのがあつて、平常よく働いて貯金して、年の暮には、繼ぎはぎだらけながらも穴のあかない著物を用意して、のし餅の一枚もついで、まあ新しい年を貧しいながらに迎へようといふのもある。すると救世軍の餅籠はそういふところには配られないんですつて。ポロ／＼の著物できたならしくうづくまつてゐる貧民の方が恩恵にあづかるのでせう。そうすれば、つまり、怠け者が勞せずして、お餅をもらふわけですもの」。

乙「私達だつて、一生懸命はたらいで、うつすべらなのし餅一枚買ふよりも、ゴロリとねてゐて、貰つた方がよいと思ふようになりますね、名譽心さへすてゝしまへばね」。

甲「そうですね。中には「それ救世軍が來た」といふと、急に家の中をとりちらして、目ぼしいものはかくしてしまつて、俄か病人をこしらへて、困つた様子をするといふこともきゝましたよ」。

乙「そういふこともあるでせうとも。一體お餅をたべなければ、年が越せないとか、お正月が來ないとかいふ考が私にはわかりませんの、そりや、昔からの美しい習慣ですから、それを無理にやぶらなくつてもいゝんです。が、慈善鍋が年中行事の一つになつてしまつては、折角の貧民救濟も永久的のものといへないと思ひますの」。

甲「施すといふことは美しいことに違ひないんですけれども方法をあやまると思ひますよ。私の考へでは、慈善鍋から集まるお金を、その年々にお餅や消耗品にかへてしまはしないで、何か本當に貧民の生活状態を改善し、彼等の日常生活を愉快にする事が出来るように用ひたらどうかと思ふのですよ。そりや、一年だけの醸金で出來なければ、二年でも三年でもまとめてね。例へば、貧民窟のあの病氣の原因となる下水の改良だけでもどんなによいでせう。或は毎年少しづつでもあのトンネル長屋なんかを改築して行くとか、泥濘の道路をよくするとか一時に出來なくても、永久的救濟法の道はいくらもあり、また必要ぢやないんでせうか」。

乙「そうですね。私いつか鮫ヶ橋へ行つて見ました

が、あそこは貧民窟といつても、かなり上等な方だつて聞きました。それでも大變ね。丁度雨あがりでしたが、まあきたない子供のうちや／＼せまい横丁や、壘一壘に何人もゐるんでびつくりしましたよ。あそこには二葉保育園といふのもあつて、子供の遊び場はあるんですが、それでもまだなか／＼大變です。私託兒所のことにはよくはしらないけれど、あのきたない中にうづくまつてゐる子供等をあかるい気持ちのよい室に入れるだけでも、どんなに親も子も助かるかしれないんですね。

甲「託兒所といへば、このごろ大分問題になつてゐるようね。先達も學校へ来た方の話によると、なかなか困難な事業ですつてね。第一そこに働く先生方がとてもつかないんですつて。わづかの手當で朝から晩まで、貧兒の世話ですつてね。たい遊んでやるだけちやすまないんですつてね。著物から食物から何から何までするんですつて、そして一日中、虱の子供を抱いたりおぶつたりしてね。身體のつかれはひどいし、おまけに手不足でせう。自分の時間は少しもなし、夜は新聞さへよむ事も出来ない位つかれてしまふさうですよ」。

乙「それちや、いくら獻身的だつて續くわけはありませぬね。元來が貧民窟の子供は暗い氣分で、氣がいらだつて手におへないのが多いんですもの、それを世話する先生が、疲れきつてゐては、折角託兒所へ子供を收容しても、效果は少いわけちやありませんか」。

甲「だから託兒所の經營難といふことが問題になつて來るんでせうね。まあ、話がどん／＼こんで來ましたけれどもね、つまり貧民の救濟といふことは私の考へではかう思ひますの、どんなに小さいことでもよいから永久的、根本的の計畫をしたいんです。そりや、すぐに何か施すといふことは、目の前に人がよろこぶので嬉しい事ですけれども、その時きりですものねえ。遠まわしの様でも、源へ源へとさかのぼつてやつて行けば、目立たなくて、結果はそんなにすぐ出て來なくつても、その方が永久的の方策だと思ひますよ。さうちやありませんか」。

乙「もう、そろ／＼あの慈善鍋でも、氣がつきさうなものです。誰か／＼何か主張しさうなものぢありませんか。そりや私達は世間がせまいから、よく事情がわからないで、こんな空論をいつてゐるのか」

もしれませんけれどもね。大に奮習打破で、「今年こそ餅くばりをやめてこの醜金を託兒所施設の資金にしよう」とか「無料治療所」をつくらうとか或はその貧民窟に相當した老幼にも出来る職業の紹介を施設をしようとか何とかありさうなものですのにね」。

甲「職業をあたへるといふことが、本當の意味の慈善でせうね。そりや、病人ばかりで何にも出来ませんといふ家は別として、老人は老人相當に子供は子供相當に何か仕事をして、その勞力に對して報酬を得るといふことが一番よいのでせう。勿論、わづかの勞力に多く酬いてやるといふことが貧民には必要と思ひますよ」。

乙「よく、乞食を三日するとやめられないつて云ひますけれどもね、人間が怠け心をおこしたらもう駄目ね。働くといふことから云へば、貧乏者の子澤山で、あゝいふ社會にはどうも子供が多くて足まどひがあるのですから、今あなたが仰つたやうに、子供等を晝間預つて、親達を充分に、働かせるといふことは、救濟の一番手近い、さうしてまた根本的な方法でせうね」。

甲「でも、橋の下の乞食に一錢二錢投げてやるとい

ふことは誰にも出来すけれども、一つの託兒所をつくるといふことになる、一寸考へが及びませんね」。

乙「ですからさ、一人が一時に澤山お金は出せないから、あの慈善鍋のやうなやりかたで、大勢の人によくその趣旨をわかつてもらつて、わづかづかのお金を出してもらふのですよ。そして、年一年と實行してゆけばいゝぢやありませんか。五錢や十錢お鍋に入れるのは何でもありませんよ、だけれども、自分の主義に反對したことにそのお金がつかはれてゆくと思ふと、たとひ一錢でも出したくないんです」。

甲「それに、此頃のやうに、あり／＼とあのお餅くばりの弊害を聞きつけては、「あゝまた今年もこれが」と思つてしまひます」。

乙「今に、私達が考へてゐるやうな事が輿論になつて、その道の人も目覺めて、根本的な方法をとるようになる時が來ませうよ。そしたら私はお鍋にお金をいれるばかりぢやない自分でお鍋のまへにたつて人にも入れさせるようにしますよ」。

甲「あなたがお鍋のまへに立つたら、さぞ熱心に演説位お初めになりさうね」。

乙「まあ、ひどいこと。でも、お互にミリオチアでないから、かうした勝手なことも云つてゐるのね」。

甲「だつてミリオチアは百人の中たつた一人で、中産階級も一人で、あとの九十八人は貧民階級に属するといふから、私達も多数黨でいゝぢやありませんか」。

乙「まあ、貧乏してゐるといふ／＼理屈がいひたくなつていゝんですねえ」。

* * * * *

二人は何臺かの満員電車を見送つて、ふと〇〇行の車内に消えた
(二二、二三)

○編輯室より

○倉橋主幹は、豫定の通り更年と、ともに渡英されたと伺ひました。

したがつて此の後當分の問手紙の宛所は、英國ロンドン市、日本大使館氣付(C/o Japanese Embassy, London, England)となりま

○ おー寒む、こ寒む、

○ おー寒むこ寒む、山から小僧が飛んで来た、なんといつて飛んで来た、寒いとて飛んで来た、茶碗のかけで、あたまこつきりはつてやれ、

○ おー寒むこ寒む、山から小僧が泣いて来た、なんといつて泣いて来た、寒いとて泣いて来た、
(東京市)

○ おーさぶこさぶ、猿の甚平(羽織の名)かつてこう、子供は風の子、大人は火の子、
(大阪市)

○ おー寒むこ寒む、こ寒むのしりへ、氷がはつて、絲引きやばり／＼、
繩ひきやばり／＼。
(宇治山田市)

○ おー寒や、こと／＼山へ頭巾置いて来て、取にこがし、もどらうか、取りにいくのも寒いし、戻るも寒いし、馳の皮などがぶつてけ

(村尾氏の「童謡の中より」)
(四日市市)